

高等学校の新学習指導要領解説書における「新聞」関連記述(抜粋)

この資料は、新学習指導要領（平成30年3月告示）解説（同年7月）から、「新聞」「報道」「論説」「ニュース」などの記述を抜き出したものです。「新聞」以外の語句については、新聞との関連性を勘案して抽出しています。

【地理歴史科】

第2章 地理歴史科の各科目

第1節 地理総合

2 内容とその取扱い

C 持続可能な地域づくりと私たち

(1) 自然環境と防災

(1) 自然環境と防災

人間と自然環境との相互依存関係や地域などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 我が国をはじめ世界で見られる自然災害や生徒の生活圏で見られる自然災害を基に、地域の自然環境の特色と自然災害への備えや対応との関わりとともに、自然災害の規模や頻度、地域性を踏まえた備えや対応の重要性などについて理解すること。

(イ) 様々な自然災害に対応したハザードマップや新旧地形図をはじめとする各種の地理情報について、その情報を収集し、読み取り、まとめる地理的スキルを身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 地域性を踏まえた防災について、自然及び社会的条件との関わり、地域の共通点や差異、持続可能な地域づくりなどに着目して、主題を設定し、自然災害への備えや対応などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

内容の取扱い

ウ 内容のCについては、次のとおり取り扱うものとする。

(ア) (1)については、次のとおり取り扱うこと。

日本は変化に富んだ地形や気候をもち、様々な自然災害が多発することから、早くから自然災害への対応に努めてきたことなどを、具体例を通して取り扱うこと。その際、地形図やハザードマップなどの主題図の読図など、日常生活と結び付いた地理的スキルを身に付けるとともに、防災意識を高めるよう工夫すること。

「我が国をはじめ世界で見られる自然災害」及び「生徒の生活圏で見られる自然災害」については、それぞれ地震災害や津波災害、風水害、火山災害などの中から、適切な事例を取り上げること。

(略) この中項目は、人間と自然環境との相互依存関係や地域などに関わる視点に着目して、地域性を踏まえた防災を多面的・多角的に考察し、表現する力を育成するとともに、自然環境の特色と防災との関わりや、地域性を踏まえた防災の重要性などを理解し、そのために必要な技能を身に付けられるようにすることが求められている。(略)

次に、この中項目における学習活動の展開例を示す。これらは、あくまでも例示であり、各学校において、例示と異なる主題や問い、取り上げ方で指導を行うことができる。

学習指導の展開例 <「生活圏の防災」を扱った事例>

例えば、「私たちのまちは、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか」といった問いを立てて、ハザードマップなどの資料を基に地域の自然環境について考察したり、地域の自然及び社会的条件に合った防災の在り方について話し合ったりする学習活動が考えられる。このような学習活動を通して、生活圏で想定される自然災害についての認識を深め、日常における防災意識を高めたり、緊急の場合の適切な行動について具体的に考えたりするとともに、自分たちの生活を自然との関わりから考えようとする態度を身に付けることが大切である。

① ハザードマップの読図、仮説の設定

学校が所在する市町村が発行するハザードマップから、想定される主な災害と危険性の高い地域を読み取り、これまでの自然環境と災害に関する学習を基に、「なぜその場所は危険性が高いと評価されているのだろうか」といった問いを立てて追究する。その際、「その場所で河川の氾濫が予想されているのは、氾濫しやすい地形的な特徴があるからではないか」、「その場所で地震による被害が大きいと予想されているのは、開発の歴史と関わりがあるのではないか」などといった、その場所の危険性が高いと評価される理由について仮説を設定する。

② 様々な資料を使った仮説の検証

新旧地形図やインターネット等で閲覧可能な土地条件図や治水地形分類図、図書館等で入手可能な過去の災害に関する資料や**新聞記事**などの収集、現地での観察や野外調査などを基に、仮説の検証を行うことで、防災に関わる地域の地理的環境の特徴について理解を深める。例えば、地形図に示された等高線から土地の高低や山地・台地・低地などのおおまかな地形、河川的位置や水流の方向を読み取ったり、治水地形分類図などから扇状地や自然堤防、砂丘、旧河道などの地形区分や干拓地、盛土地・埋立地、切土地などの地形の改変を確認したり、過去の災害についてまとめた資料から災害の発生場所や規模、復旧までの経緯、その後取られた対策などについてまとめたりするといった学習活動が考えられる。その際、現地で観察や野外調査を行う場合には、その地域で防災のために行われている工夫について確認したり、大雨や台風などの際に考えられる河川の増水や道路の冠水、倒木などについて想像したりすること

で、災害発生時に現地がどうなるのか、どのように行動すればいいのかを想定することなども大切である。

また、仮説の検証に当たっては、観察や野外調査、文献調査の結果を踏まえて、十分な議論が行われる必要がある。そこでは仮説を裏付ける結果のみを取り上げることなく、様々な側面から調査結果を吟味し、調査結果と齟齬を生じるようであれば、必要に応じて仮説自体を批判的に吟味することも大切である。そのような場合、再度、①の手順に戻って仮説を設定し直し、再調査を行うことも考えられる。

③ 調査結果の整理と対策についての意見交換

複数の地図から読み取った情報を関連付けて、地域の特徴をまとめる地理的技能を生かし、洪水や地震、土砂災害など、複数のハザードマップを基に、予想される災害の特徴によって地域区分した地図を新たに作成する。例えば、洪水の際に浸水被害を受けやすい低地、地震の際に家屋の倒壊などが想定される住宅密集地、豪雨の際に土砂災害が予想される傾斜地などといった区分が考えられる。次に、「区分したそれぞれの地域では、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか」といった問いを立てて追究する。市町村役場、避難場所、消防署、病院などの防災にとって重要な施設の位置、集落の分布や規模、道路網や橋の位置などに留意して、区分したそれぞれの地域の自然及び社会的条件に合わせた避難計画や防災のための施策の在り方について考察する学習活動が考えられる。その際、既述のように、災害発生時に現地がどうなるか、どのように行動すればいいのかなどについて具体的に考えたり、予想される災害の頻度や規模を考慮して、取るべき対策について議論したりすることが考えられる。

また、集落の移転など大規模な工事等を伴う事業について、費用と効果、地域住民の願いと全体の利益、代替策の有無などの観点から、グループごとにまとめて意見を発表したり議論したりするなどの学習活動を行うことで、防災に関する事業の意義について理解を深めるなどの学習活動も考えられる。

(2) 生活圏の調査と地域の展望

(2) 生活圏の調査と地域の展望

空間的相互依存作用や地域などに着目して、課題を探究する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 生活圏の調査を基に、地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などについて理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 生活圏の地理的な課題について、生活圏内や生活圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりなどに着目して、主題を設定し、課題解決に求め

られる取組などを多面的・多角的に考察，構想し，表現すること。

内容の取扱い

(イ)(2)については，次のとおり取り扱うこと。

「生活圏の調査」については，その指導に当たって，これまでの学習成果を活用しながら，生徒の特性や学校所在地の事情などを考慮して，地域調査を実施し，生徒が適切にその方法を身に付けるよう工夫すること。

(略) この中項目は，空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して，生活圏の地理的な課題を多面的・多角的に考察し，表現する力を育成するとともに，地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などを理解できるようにすることが求められている。(略)

次に，この中項目における学習活動の展開例を示す。これらは，あくまでも例示であり，各学校において，例示と異なる主題や問い，取り上げ方で指導を行うことができる。

学習指導の展開例 <「空き家問題」を扱った事例>

1 課題の設定

これまでの「地理総合」の学習内容と，小・中学校社会科の「地域調査」の経験を踏まえて調査する課題を決める。その際，調査してみたい地域の課題について，自分自身の日常生活や通学途上から見いだしたり，**新聞**やインターネットの記事の中から選びだしたりして，自分たちの地域で何が解決すべき課題なのかをグループに分かれて話し合うなどの工夫も考えられる。またその際，なぜその課題を選択するのかという調査の趣旨を明確にすることも大切である。ここでは「なぜ，空き家が多くなっているのだろうか。どうすれば，空き家問題が解決できるのだろうか」という課題を生徒が設定したこととする。

2 課題の探究

地域調査においては，事前の準備となる事前調査（デスクワーク）と課題を検証する現地調査（フィールドワーク）を行う必要がある。

① 事前調査(デスクワーク)

事前準備となるデスクワークは，取り組もうとする課題に関連して，地域の概要とともに対象となる課題や課題に関わる諸事象を含む調査の全体像を大観することが必要である。そのために，図書室にある書籍，**新聞**やインターネット，あるいは地方史(県史や市町村史など)から入手した資料を基に情報収集を行う。

② 仮説の設定と調査計画の作成

収集した情報を整理してGISを使って地図化するなどの分析をして，そこから課題意識に基づいた仮説を立てる（仮説の設定）。例えば，「農村だけではなく都市でも空き家が発生しているのはなぜだろうか」という課題を設定し，大都市でも都心などに新しく高層の集合住宅が建てられていることで，都市内部での転居者が増

大していることから空き家が増えたのではないかといった仮説を立てるなど、様々な可能性を検討することが考えられる。立てられた仮説をそれぞれよく検討、整理した上で絞り込み、これを検証するための調査項目や調査対象、調査方法などを吟味し、班別に聞き取り調査先を割り振り、現地調査の計画を立てる。その際、今後の現地調査が、小・中学校社会科で行った地域調査学習をより深めるスパイラルな学習となるように配慮する。例えば、これまで体験した地域調査学習の経験を振り返り、現地調査の計画を作成することも効果的で、何を調査してくるのか、調査対象地域をどこにするのか、調査に当たり何を用意するのかなどを十分に話し合うことが大切である。また、この段階で立てられた空き家の発生要因の見通しに対して、その解決策についても可能な範囲で想定しておくことも大切である。

③ 現地調査(フィールドワーク)

実際の現地調査に当たっては、事前に立てた調査計画に基づき、無理なく実施することが大切である。当日の天気や交通の状況などを加味し、まずは安全に留意して余裕をもった行動に留意する必要がある。特に聞き取り調査などの場合には、事前に電話や手紙を使って相手の都合を確認するとともに、調査の目的や聞き取りしたい事項について整理して現地に赴くことが大切である。例えば、役所での聞き取り調査を担当するグループは、調査対象地域の人口や世帯に関する統計などの資料、空き家に関する行政の調査報告書や空き家の再利用への取組について、具体的に何を聞き取り、どのような資料が必要かをあらかじめ考えて現地調査に当たることなどが大切である。

④ 整理、分析(仮説の検証)

現地調査で収集した資料や聞き取りを行った内容をまとめる。その際、得た情報や資料を地図化したり、それを基にして図表を作成したりする。それと同時に資料の収集や聞き取りから分かったことを整理し、仮説の妥当性を検証しつつ、不十分な点については情報の再収集と整理、分析を追加して行い、新たな発見や理解の深化によっては、仮説の修正や新たな課題設定を行うことも考えられる。

3 発表

担当グループごとに、調査内容を発表し、さらに調査結果を受けて、調査対象地域の空き家問題を解決するための方策を全体で討論し、持続可能な社会を築くためにそれぞれの方策の評価を行い、地域を改善するための提言としてまとめる。

また、授業とは別に機会を捉えて、調査過程の説明や課題と解決に向けた提言を設ける機会を設けることも考えられる。例えば、取材先に謝辞とともに報告することはもちろん、文化祭での発表や、学校ホームページへの公開、地域の行事などでの発表や意見交換、あるいは住民への提言や地図展などで発表することなども考えられる。

3 指導計画の作成と指導上の配慮事項

(5) 専門家などとの連携について (内容の取扱いの(1)のオ)

オ 調査の実施や諸資料の収集に当たっては、専門家や関係諸機関などと円滑に連携・協働するなどして、社会との関わりを意識した活動を重視すること。

中央教育審議会答申においては、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」として「主権者として求められる資質・能力」を挙げ、「家庭や学校、地域、国や国際社会の課題の解決を視野に入れ、学校の政治的中立性を確保しつつ、…現実の社会的事象を取り扱っていくことが求められる。その際、専門家や関係機関の協力を得て実践的な教育活動を行うとともに、現実の複雑な課題について児童生徒が課題や様々な対立する意見等を分かりやすく解説する**新聞**や専門的な資料等を活用することが期待される」ことが示されている。また、このことに関連しては、社会、地理歴史、公民科に共通する「内容の見直し」においても、教育環境の充実のために求められる条件整備に関わる内容として、「教科の内容に関係する専門家や関係諸機関等と円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実させること」と示されているところである。そこで、現実の社会的事象を地理的な見方・考え方を働かせて捉えようとする地理の学習においては、それらの趣旨の重要性を踏まえ、学習内容の全体にわたる配慮事項として、この「社会との関わりを意識した活動を重視する」旨を明記することとした。

第2節 地理探求

2 内容とその取扱い

A 現代世界の系統地理的考察

(2) 資源、産業

(2) 資源、産業

場所や空間的相互依存作用などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 資源・エネルギーや農業、工業などに関わる諸事象を基に、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、資源・エネルギー、食料問題の現状や要因、解決に向けた取組などについて理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 資源・エネルギーや農業、工業などに関わる諸事象について、場所の特徴や場所の結び付きなどに着目して、主題を設定し、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

内容の取扱い

(イ)(2)については、次のとおり取り扱うこと。

「資源・エネルギーや農業、工業などに関わる諸事象」については、技術革新などによって新たに資源やエネルギーの利用が可能になったり、新たな産業が生まれたり成長したりすることから、社会の動向を踏まえて取り上げる事象を工夫すること。

(略) この中項目は、場所や空間的相互依存作用などに関わる視点に着目して、資源、産業に関わる諸事象を多面的・多角的に考察し、表現する力を育成するとともに、資源、産業に関わる諸事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の現状や要因、解決に向けた取組などを理解できるようにすることが求められている。(略)

「内容の取扱い」などに示された留意事項については、次のとおりである。

技術革新などによって新たに資源やエネルギーの利用が可能になったり、新たな産業が生まれたり成長したりすることから、社会の動向を踏まえて取り上げる事象を工夫する(内容の取扱い)については、資源、産業に関わる広範な事象から、どのような事象を選択し、取り上げるかを示したものである。資源、産業に関わる事象は、技術革新や世界経済の動向などによって変化することから、社会の動きを踏まえて取り上げる事象を適切に選定する必要がある。また、新たな資源やエネルギー、産業は、テレビや**新聞**などの**ニュース**として取り上げられることも多いことから、生徒の興味・関心を喚起するためにも、これらの新たな動向についても注視し、適宜適切に取り扱うことも大切である。例えば、日本で再生可能エネルギーを含めた多様なエネルギー開発が進められていることを踏まえて、資源・エネルギー問題の対策を取り扱った学習において、海底資源や海洋エネルギーの開発や推進を扱ったり、また、日本の産業がより付加価値の高い知識集約型の産業に移行する動きを見せていることを踏まえて、産業発達の規則性、傾向性を取り扱った学習において、映像や音楽、アニメーションなどの制作や販売に関わるコンテンツ産業の発達を扱ったりすることなどが考えられる。

3 指導計画の作成と指導上の配慮事項

(5) 専門家などとの連携について(内容の取扱いの(1)のオ)

オ 調査の実施や諸資料の収集に当たっては、専門家や関係諸機関などと円滑に連携・協働するなどして、社会との関わりを意識した活動を重視すること。

中央教育審議会答申においては、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」として「主権者として求められる資質・能力」を挙げ、「家庭や学校、地域、国や国際社会の課題の解決を視野に入れ、学校の政治的中立性を確保しつつ、…現実の社会的事象を取り扱っていくことが求められる。その際、専門家や関係機関の協力を得て実践的な教育活動を行うとともに、現実の複雑な課題について児童生徒が課題や様々な対立する意見等を分かりやすく解説する**新聞**や専門的な資料等を活用することが期待される」ことが示されている。また、このことに関連しては、社会、地理歴史、公民科に共通する「内容の見直し」においても、教育環境の充実のために求められる条件整備に関わる内容として、「教科の内

容に係る専門家や関係諸機関等と円滑な連携・協働を図り、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実させること」と示されているところである。そこで、現実には生起している社会的事象を扱うことの多い地理の学習においては、それらの趣旨の重要性を踏まえ、学習内容の全体にわたる配慮事項として、この「社会との関わりを意識した活動を重視する」旨を明記することとした。

第3節 歴史総合

2 内容とその取扱い

A 歴史の扉

(1) 歴史と私たち

この中項目では、私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象を基に、近代化、国際秩序の変化や大衆化、グローバル化などの歴史の変化と関わらせて、諸事象と日本や日本周辺の地域及び世界の歴史との関連性について考察し表現することにより、私たちに関わる諸事象が、日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とつながっていることを理解する学習を主なねらいとしている。(略)

諸資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象を基に、それらが日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とつながっていることを理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 近代化、国際秩序の変化や大衆化、グローバル化などの歴史の変化と関わらせて、アで取り上げる諸事象と日本や日本周辺の地域及び世界の歴史との関連性について考察し、表現すること。

内容の取扱い

(1)については、中学校社会科の学習を踏まえ、生徒の空間的な認識に広がりをもたせるよう指導を工夫すること。

学習に当たっては、例えば、「私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象にはどのような歴史的背景があるだろうか」などの課題(問い)を設定して、イの(イ)の近代化、国際秩序の変化や大衆化、グローバル化などの歴史の変化と関わらせながら、資料を活用し、私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象と日本や日本周辺の地域及び世界の歴史との関連性について考察し表現することにより、それらが日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とつながっていることを理解ができるようにすることが大切である。

私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象とは、生徒の日常生活に関わる諸事象や地域の諸事象を意味している。例えば、生活における時間規律、身の回りの菓子や料理、地域の産業や交通、地域の祭りや行事、就職や受験、**新聞**やテレビ、遊びやスポーツなど、

様々なものが考えられる。これらの生徒の身の回りの諸事象が、日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とつながっていることを、具体的な事例に則して理解することができるよう、工夫して指導することが必要である。

近代化、国際秩序の変化や大衆化、グローバル化などの歴史の変化と関わらせとは、中学校社会科の学習を踏まえ、私たちの生活や身近な地域の歴史と日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とを結び付けながら、近現代の歴史の大きな変化と関わらせて学習することを示している。例えば、地域の人口や学校の規模の動態などを近代化と関連付けて扱ったり、地域に残る記念碑や、地域の情報伝達の手段の歴史的な変化などを国際秩序の変化や大衆化と関連付けて扱ったり、日用品の生産国の変化や外国語教育の重視などをグローバル化と関連付けて扱ったりすることなどが考えられる。私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象と、日本や日本周辺の地域及び世界の歴史とのつながりに気付くとともに、それらを結び付けながら近現代の歴史の大きな変化について学ぶことの意義を実感できる学習が求められる。

「生徒の空間的な認識に広がりをもたせる」(内容の取扱い)とは、生徒の学習に向かう視野に広がりを持たせるように指導を工夫することを意味している。具体的には、中学校社会科歴史的分野における学習や、私たちの生活や身近な地域になどに見られる諸事象などを起点としつつ、生徒がこの科目の目標の(1)に示された「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え」て、空間的な広がりをもって歴史を考察できるように指導を工夫することが大切である。

指導に当たっては、生徒が年表や地図、写真や映像、統計等の様々な資料を活用することなどを通して、歴史の考察における比較することや関連付けることの意義をとらえることができるよう、工夫して指導することが求められる。(略)

(2) 歴史の特質と資料

この中項目では、日本や世界の様々な地域の人々の歴史的な営みの痕跡や記録である遺物、文書、図像などの資料を活用し、複数の資料の関係や異同に着目して、資料から読み取った情報の意味や意義、特色などを考察し表現することにより、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解すること、資料を取り扱う際の留意点に気付くことを主なねらいとしている。(略)

日本や世界の様々な地域の人々の歴史的な営みの痕跡や記録である遺物、文書、図像などの資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 複数の資料の関係や異同に着目して、資料から読み取った情報の意味や意義、特色

などを考察し、表現すること。

内容の取扱い

(2)については、資料から読み取る諸事象の解釈の違いが複数の叙述を生むことを理解できるよう具体的な事例を取り上げて指導すること。また、歴史の叙述には、諸資料の検証と論理性などが求められることに気付くようにすること。

学習に当たっては、イ(ア)の複数の資料の関係や異同に着目して、例えば、「今では見ることのできない過去の事柄が分かるのはなぜだろうか」、「資料を扱う際にはどういうことに留意する必要があるだろうか」などの課題(問い)を設定し、「歴史」が表すものには、過去の事柄そのものという意味と、過去の事柄についての叙述(歴史叙述)という意味とがあること、歴史叙述は過去の事柄に対する驚きや現在の問題に対する関心などを出発点としていること、歴史叙述のためには過去の事柄について探る手がかりとなる材料である歴史資料が必要であることなどに気付くよう、指導を工夫することが大切である。また、歴史を叙述する際には、資料の種類、特性や作成の時期、場所、主体、目的、脈絡等を踏まえた批判的な読み取りと吟味が重要である。文字資料であれば「どんな人物が、いつ、どのような背景で作成したものだろうか」、「それは作成者が直接見聞した記録か、伝聞の記録か、作者の解釈か、仮説か、感想か」など、資料のもつ意味を考察し、その上で、様々な資料から読み取った情報を論理的に結び付けて解釈する必要があることなどに気付くよう指導を工夫することが大切である。

遺物、文書、図像などの資料とは、遺跡・遺構、碑文、日記、手紙、**新聞**・雑誌などの様々な文書、著述、文学・芸術作品、風刺画、ポスター、写真、映像、口述記録(オーラルヒストリー)など、過去を知る手がかりとなる様々な歴史資料を意味している。

資料に基づいて歴史が叙述されていることについては、例えば、歴史研究においてどのようなものが資料として扱われているかを調べるものの他、実際に自分で歴史資料を吟味したり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることなどを平素の学習にも位置付けて行うことが大切である。

指導に当たっては、生徒が遺物、文書、図像などの歴史資料に触れ、それらと歴史叙述との関係について考察することなどを通じて、歴史的な考察の拠り所として資料が必要であること、文字資料だけでなく様々なものを資料として活用できること、資料の批判的な読み取りと吟味が重要であることなどに気付くことができるよう、指導を工夫することが求められる。

以下は、この中項目に関する学習の例である。

例：歴史の特質と資料の学習

資料と叙述の関係については、以下のような学習が考えられる。例えば、過去の人々の日常生活について読み取れる様々な資料を取り上げ、「各時期の資料から、人々の日常生活はどのように変化したと捉えられるだろうか」などの課題(問い)を設定して、過去の

異なる時期の絵画、文書、日記、**新聞**・雑誌、写真、映像等の豊富な資料を教材として、それぞれの時期における衣食住、労働、余暇、教育などの生活の様子を読み取り、その間の変化を捉えて、文章に表現する。このような学習を通じて、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解する。その際、資料の状況によっては叙述が困難である場合があることにも気付くようにする。

また、同一の事象についての視点や立場が異なる資料を取り上げ、「それぞれの資料の意図するものは何だろうか、また、なぜそのような資料が作成されたと考えられるだろうか」などの課題(問い)を設定して、同一の事象に関する複数の風刺画やポスター等の資料を基に、作成の時期や場所、作成者等を特定して、それぞれの表現の内容を比較し、当時の時代状況と結び付けることにより、それらの資料の意図や作成された目的を対比的に捉え、諸資料から読み取った情報の意味や意義、特色などを考察し表現することを通じて、同じ資料を基にした叙述であっても、資料の解釈によって複数の歴史叙述が存在することを理解するなどの学習が考えられる。

このような学習を通して、歴史の叙述には諸資料の検証と論理性などが求められることに気付くことが大切であり、それらの資料の吟味を踏まえて、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解することが重要である。

C 国際秩序の変化や大衆化と私たち

(1) 国際秩序の変化や大衆化への問い

この中項目では、中学校までの学習を踏まえて、諸資料を活用して情報を読み取ったりまとめたりする技能を習得し、私たちの生活や社会の在り方が、国際秩序の変化や大衆化に伴い変化したことについて考察するための問いを表現することをねらいとしている。(略)

国際関係の緊密化、アメリカ合衆国とソヴィエト連邦の台頭、植民地の独立、大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化、生活様式の変化などに関する資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような技能を身に付けること。

(ア) 資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 国際秩序の変化や大衆化に伴う生活や社会の変容について考察し、問いを表現すること。

内容の取扱い

(1)については、中学校までの学習並びにA及びBの学習を踏まえ、学習内容への課題意識をもたせるとともに、(2)、(3)及び(4)の学習内容を見通して指導すること。

学習に当たっては、取り上げた複数の資料を組み合わせ活用し、身近な生活と関わら

せて課題意識を育み、情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を習得しつつ、イ(ア)の国際秩序の変化や大衆化に伴う生活や社会の変容について考察し、その過程で生徒が見いだした疑問を問いで表現することで、この中項目の冒頭に示したねらいを実現できるようにする。

問いを表現するとは、国際秩序の変化や大衆化に伴い生活や社会が変化したことを示す資料から、情報を読み取ったりまとめたり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより、生徒が興味・関心をもったこと、疑問に思ったこと、追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点であることを踏まえ、生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で、学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である。(略)

学習に際しては、以下に示す資料を活用して、生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、人々の生活や社会の在り方が国際秩序の変化や大衆化に伴い変化したことに関わって抱いた興味・関心や疑問、追究してみたいことなどを見いだして、自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。(略)

大衆の政治的・経済的・社会的地位の変化を取り上げた場合には、例えば、教師が、参政権の拡大や政党の発展を示す資料、労働組合や女性団体などの組織の拡大を示す資料、デモ行進やストライキなどの拡大を示す資料、国民の所得格差の縮小を示す資料、初等・中等・高等教育の拡大の様子を示す資料、女子教育の普及の様子を示す資料、**新聞**・雑誌の発行部数の増大を示す資料、ラジオの生産台数の増加や当時の放送プログラム等の資料などを提示し、当時の人々が求めたものとそれ以前の時代の人々が求めたものの違いなど、生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料を読み解くことができるように指導を工夫する。生徒は、それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、大衆社会の特徴を考察する。(略)

(2) 第一次世界大戦と大衆社会

この中項目では、日本とその他の国や地域の動向を比較したり、関連付けたりするなどして、第一次世界大戦の性格と惨禍、日本とアジア及び太平洋地域の関係や国際協調体制の特徴などを考察したり表現したりして、総力戦と第一次世界大戦後の国際協調体制を理解できるようにすること、また、第一次世界大戦後の社会の変容と社会運動との関連などを考察したり表現したりして、大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解できるようにすることをねらいとしている。(略)

諸資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。(略)

【小項目(イ)】

ア 次のような知識を身に付けること。

(イ) 大衆の政治参加と女性の地位向上、大正デモクラシーと政党政治、大量消費社会と

大衆文化、教育の普及とマスメディアの発達などを基に、大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 第一次世界大戦前後の社会の変化などに着目して、主題を設定し、日本とその他の国や地域の動向を比較したり、関連付けたりするなどして、第一次世界大戦後の社会の変容と社会運動との関連などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

内容の取扱い

(2)のアの(イ)については、世論の影響力が高まる中で民主主義的風潮が形成され、日本において議会政治に基づく政党内閣制が機能するようになったことに触れること。

学習に当たっては、(1)で表現した学習への問いを踏まえて生徒の学習への動機付けや見通しを促しつつ、イ(イ)の第一次世界大戦前後の社会の変化などに着目し、小項目のねらいに則した考察を導くための主題を設定し、その主題を、例えば、「なぜ、1920年代に大衆文化が広範囲に及んだのだろうか」などの学習上の課題（小項目全体に関わる問い）として設定する。これを踏まえ、日本とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、多面的・多角的に考察したり表現したりすることにより、大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解する学習が考えられる。(略)

教育の普及とマスメディアの発達については、教育が普及したことでマスメディアによる情報を活用する層が増加し、新聞・雑誌、ラジオ、その他メディアが拡大したことを扱い、大衆の政治的、社会的な自覚が高まり、マスメディアの発達とともに政治に大きな影響を及ぼすようになったことなどについて気付くようにする。

上記の大衆の政治参加と女性の地位向上、大正デモクラシーと政党政治、大量消費社会と大衆文化、教育の普及とマスメディアの発達の学習については、小項目の主題を基にした学習上の課題（小項目全体に関わる問い）を踏まえ、小項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのため、推移や展開を考察するための課題（問い）を設定し、さらに事象を比較し関連付けて考察するための課題（問い）を設定するなど、事象それぞれの学習の際に、段階的に課題（問い）を設定することが求められる。

こうした日本とその他の国や地域の動向を比較したり、関連付けたりする学習活動を通じて、第一次世界大戦後の社会の変容と社会運動との関連などを、多面的・多角的に考察し、表現することにより、大衆社会の形成と社会運動の広がりを理解することができる。

(略)

D グローバル化と私たち

(1) グローバル化への問い

この中項目では、中学校までの学習を踏まえてグローバル化に伴い生活や社会が変化したことを示す資料を取り上げて、情報を読み取ったりまとめたりする技能を習得し、現代のグローバル化について考察するための問いを表現することをねらいとしている。(略)

冷戦と国際関係，人と資本の移動，高度情報通信，食料と人口，資源・エネルギーと地球環境，感染症，多様な人々の共存などに関する資料を活用し，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような技能を身に付けること。

(ア) 資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること。

イ 次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(イ) グローバル化に伴う生活や社会の変容について考察し，問いを表現すること。

内容の取扱い

(1)については，中学校までの学習並びにA，B及びCの学習を踏まえ，学習内容への課題意識をもたせるとともに，(2)及び(3)の学習内容を見通して指導すること。

学習に当たっては，取り上げた複数の資料を組み合わせ活用し，身近な生活と関わらせて課題意識を育み，情報を読み取ったりまとめたりして資料を活用する技能を習得しつつ，イ(ア)のグローバル化に伴う生活や社会の変容について考察し，その過程で生徒が見いだした疑問を問いで表現することで，この中項目の冒頭に示したねらいを実現できるようにする。

問いを表現するとは，グローバル化に伴い生活や社会が変化したことを示す資料から，情報を読み取ったりまとめたり，複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより，生徒が興味・関心をもったこと，疑問に思ったこと，追究したいことなどを見いだす学習活動を意味している。歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点であることを踏まえ，生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で，学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である。(略)

学習に際しては，以下に示す資料を活用して，生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりしながら，人々の生活や社会の在り方がグローバル化に伴い変化したことに関わって抱いた興味・関心や疑問，追究してみたいことなどを見いだして，自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。(略)

多様な人々の共存を取り上げた場合は，例えば，教師が，差別の廃止や地位の向上について啓発するポスターや当事者による手記などの資料，マイノリティ（少数者）の社会進出に関する統計や条約，法律，男性や女性の**メディア**における取り上げられ方を示す資料などを提示し，現在に至るまでの宗教，民族，性別についての認識や表現の推移と社会の変化との関連など，生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料を読み解くことができるように指導を工夫する。生徒は，それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら，多様な人々の共存が国際社会において求められるようになったこと背景などについて考察する。

その際，冷戦と国際関係，人と資本の移動，高度情報通信，食料と人口，資源・エネルギーと地球環境，感染症，多様な人々の共存などに関する資料については，複数の資料を組み合わせ関連付けたり，一つの内容であっても視点の異なる複数の資料を比較したり

するなど、豊富な資料を教材として、生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりすることにより、グローバル化に伴う生活や社会の変容についての考察を深め、自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。(略)

(4) 現代的な諸課題の形成と展望

この中項目は、この科目のまとめとして位置付けられている。これまでの学習を踏まえ、持続可能な社会の実現を視野に入れ、生徒が自ら主題を設定して、日本とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、主題について多面的・多角的に考察、構想し、現代的な諸課題を理解することをねらいとしている。

内容のA、B及びC並びにDの(1)から(3)までの学習などを基に、持続可能な社会の実現を視野に入れ、主題を設定し、諸資料を活用し探究する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 歴史的経緯を踏まえて、現代的な諸課題を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 事象の背景や原因、結果や影響などに着目して、日本とその他の国や地域の動向を比較し相互に関連付けたり、現代的な諸課題を展望したりするなどして、主題について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。

内容の取扱い

(4)については、この科目のまとめとして位置付けること。その際、Bの(4)及びCの(4)の内容を更に深めたり、Bの(4)及びCの(4)とは異なる観点を取り上げたりして、この科目の学習を振り返り適切な主題を設定すること。

学習に当たっては、これまでの学習を踏まえて、イ(イ)の事象の背景や原因、結果や影響などに着目し、生徒がそれぞれの興味・関心に基づいて自ら主題を設定し、その主題を、日本とその他の国や地域の動向とを比較し相互に関連付け、現代的な諸課題を展望して、多面的・多角的に考察、構想し、表現するなどして、現代的な諸課題を理解することで、この中項目の冒頭に示したねらいを実現することができるようになる。

探究する活動とは、生徒の発想や疑問をもとに生徒自らが主題を設定し、これまでに習得した歴史の概念を用いたり、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせたりして、諸資料を活用して主体的に多面的・多角的に考察、構想し、表現する活動である。また、生徒が充実した探究活動を行うためには、教師の支援が大切である。

なお、主題の設定にあたっては、大項目B、C及びDの(1)で生徒が表現した問いや、大項目B、C及びDの(2)及び(3)の学習が進む中で見直した問いや新たに生まれてきた問いを振り返らせることが大切である。また、大項目B及びCの(4)で取り上げている五つの観点から設定された主題についての学習の成果を生かしたり、それとは別の観点を設定したりすることも考えられる。

以下は、生徒が探究活動を行う際の教師の指導(支援)の例である。これらは、あくま

で参考であり、教師が、生徒の興味・関心や学校、地域の実態に留意し、様々な状況に応じた工夫をすることが大切である。

学習指導の展開例

【主題の設定と学習上の課題（問い）の表現】

- 主題を設定する際には、これまでの「歴史総合」の学習を振り返り、主題の設定の手がかりはないかを問いかける。特に、大項目B、C及びDの(1)で生徒が表現した「問い」やB及びCの(4)で取り上げた五つの観点に基づいて設定された主題についての学習活動を生かすことも考えられる。
- 生徒がこれまでの学習を踏まえて設定した主題を、さらに焦点化するために、学習上の課題（問い）として構成させることが大切である。その主題や学習上の課題（問い）について、教師が「あなたはなぜその主題を設定したのか」、「その主題の探究はあなたにとってどのような意味を持つのか」、「それはあなた以外の人々や社会にとって、どのような意味を持つのか」などと発問するなどして、生徒が自ら設定した主題や学習上の課題の意味や意義について考えることができるよう指導を工夫することも大切である。
- また、**新聞**、テレビ、インターネットの**ニュース**や地域の史跡などを主題の発見に活用することも効果的である。
- 設定した主題を踏まえて、これまでの歴史総合で学習してきたことを基に、主題に関わる予想（仮説）を立てることで、主題に対してどのような切り口で取り上げるかなどの視点が明確となり、探究の方向性を定めることができると考えられる。

【資料の収集・分析】

- 活用する資料の選択については、これまでの学習の中で使用した資料も含め、「どのような資料が活用できそうだろうか」、「それらの資料はどこで収集できるだろうか」、「その資料は設定した主題の探究に有効であるだろうか」などと発問するなど指導を工夫することが考えられる。

【考察・構想】

- 考察、構想に際しては、歴史的経緯を踏まえるとともに、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせて、考察・構想をするよう指導を工夫する。
- また、扱った資料の特性を踏まえること、資料を公正に取り扱うことに配慮するよう指導することが必要である。

【まとめ・表現】

- 考察、構想したことから得られた結論は、資料等から導きだされた根拠を踏まえたものとなるように指導を工夫する。
- 結論を論述・レポートなどにまとめ、相互に説明したり意見を聞いたりすることにより、考察、構想をより深めるなどの学習も大切である。

- また、ディスカッション、ディベートなど生徒同士が意見交換する場面を設定したり、学習活動のまとめとしてグループやクラスでプレゼンテーションの場面を設定したりするなどの工夫が考えられる。

【学習の振り返り】

- 教師が「あなたはなぜその主題を設定したのか」、「その主題はあなたにとってどのような価値があるのか」、「それはあなた以外の人々にとって、どのような意味を持つ探究なのか」と改めて発問するなどして、生徒が自らの探究活動を振り返ることができるよう指導を工夫し、学んだことの意味に気付くようにすることも大切である。
- 生徒が振り返りの中で新たな課題（問い）を考察し、次の学習に主体的につなげることができるよう指導を工夫する。

主題の設定から、資料の収集・分析、考察・構想、発表、振り返りまでの探究の過程について、生徒自らが見通しをもつことができるようにすることも必要である。また、振り返りは、必要に応じて、学習の様々な過程において行われる場合もあることに留意する。以下は、生徒の探究活動の例である。（略）

第4節 日本史探究

2 内容とその取扱い

<「日本史探究」の学習の構成>

⑤課題（問い）の設定と資料の取扱い

「日本史探究」では、学習全般において課題（問い）を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは、第一に課題（問い）の設定であり、第二に課題（問い）の追究を促す資料の活用である。この科目では、(2)の歴史資料と時代の展望を学習する中項目に限らず、学習全般において資料を活用することが示されている。教師が学習のねらいを十分に把握し、ねらいに則した資料を選択し提示することが重要である。また、生徒が課題（問い）を考察したり、お互いに意見を表明したりする際も、適切な資料を基に、根拠を踏まえて考察するよう、指導を工夫することが重要である。

以下、それぞれに関する参考例を示す。

（略）

<資料の取扱い>

課題（問い）を設定した学習活動においては、学習全般において資料を用いて適切に活用することが重要である。そのために、資料の活用の際して、例えば、以下のような留意点が考えられる。

【資料に「問いかける」学習】

諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を段階的に身につけていくためには、例えば、文字などで記述された資料の内容と当該資料のもつ

文脈，状況，前後関係，背景を理解していくことが重要である。文字資料であれば，そこに書かれた内容から，「いつ書いたものか，どんな人物が書いたものか，どこに発表したものか」など，人物，日付，出来事などを読み取る。

さらに「それは作成者が直接見聞した記録か，伝聞の記録か，解釈や仮説か，作成者個人の感想か」，「この資料が作成された背景とはどのようなものだったのか，また，どのような意図があったと考えるか」などを教師が問い，生徒が資料のもつ意味や重要性を考えることができるように指導を工夫することが大切である。

【様々な資料の活用とその事例】

新聞・雑誌等を含む文献資料をはじめ，建造物や日常の生活用品も含めた遺跡や遺物，絵画や地図，写真等の画像，映画等の映像，それに伝承や習俗，地名，言語など，様々なものが歴史を考察する上での資料として活用できる。今日に残された資料を歴史資料として扱う際には，それぞれの資料としての有効性や限界等の基本的な特性が存在することを理解できるようにすることが大切である。その理解を踏まえ，資料から過去の出来事や景観，生活，思想，社会，伝統や文化などを推察する学習活動を通じて，歴史資料が果たす役割に気付くようにして，歴史への関心が高められるようにすることが大切である。また，「デジタル化された資料や，地域の遺構や遺物，歴史的な地形，地割や町並みの特徴などを積極的に活用」(内容の取扱い)については，以下のような活用が考えられる。

【デジタル化された資料の活用】

博物館，図書館，公文書館などでは，その収蔵品をはじめ，文化資源をデジタル化して保存を行うとともに，公開や利用を積極的に行う取組が進んでいる。これらの「デジタル化された資料」は，インターネットを利用することで，利用の可能性を拡大している。多様な歴史資料にアクセスすることで，一層の具体性をもった学習が可能となる。また資料の目録情報に加え，様々な歴史情報のデータベースが整備されてきており，これらの情報を活用し，指導計画上に適切に位置付けることが考えられる。

【地域に残る遺構や土地利用の変遷の活用】(略)

D 近現代の地域・日本と世界

(1) 近代への転換と歴史的環境

この中項目では，幕末から近代初頭の時期の歴史の展開と歴史的環境を関連付けて時代の転換を理解し，近代の特色について多面的・多角的に考察し，時代を通観する問いを表現することをねらいとしている。なお，大項目Dは，上記の通り，近現代を一つの大項目と設定しているが，中項目(1)の学習のねらいを踏まえ，ここでは，近代の特色について考察し，時代を通観する問いを表現する。(略)

諸資料を活用し，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付

けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 対外政策の変容と開国，幕藩体制の崩壊と新政権の成立を基に，近世から近代への時代の転換を理解すること。

イ 次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(イ) 欧米諸国の進出によるアジア諸国の変化，政治・経済の変化と思想への影響などに着目して，近世から近代の国家・社会の変容を多面的・多角的に考察し，表現すること。

(イ) 時代の転換に着目して，近代の特色について多面的・多角的に考察し，時代を通観する問いを表現すること。

内容の取扱い

(2) 内容の取扱いに当たっては，次の事項に配慮するものとする。

イ 内容のA，B，C及びDのそれぞれの(1)については，対外的な環境の変化や国内の諸状況の変化などを扱い，時代の転換を理解できるようにすること。それぞれの(1)のイについては，アの理解に加え，中学校社会科歴史的分野における学習の成果を活用するなどして，対象となる時代の特色を考察するための時代を通観する問いが表現できるよう指導を工夫すること。

ク 内容のDについては，次のとおり取り扱うものとする。

(1)，(2)及び(3)については，日記，書簡，自伝，公文書，**新聞**，統計，写真，地図，映像や音声，生活用品の変遷などの資料や，それらを基に作成された資料などから適切なものを取り上げること。

(略)

(2) 歴史資料と近代の展望

この中項目では，資料から情報を収集して読み取る技能を身に付けるとともに，読み取った情報から近代の特色についての仮説を表現することを通じて，中項目(3)に向けて，見通しをもった学習を展開できるようにすることがねらいである。なお，この大項目Dは近現代の歴史を対象としているが，(1)と同様に，ここでは近代の特色について考察し，仮説を表現する。(略)

諸資料を活用し，(1)で表現した時代を通観する問いを踏まえ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような技能を身に付けること。

(ア) 近代の特色を示す適切な歴史資料を基に，資料から歴史に関わる情報を収集し，読み取る技能を身に付けること。

イ 次のような思考力，判断力，表現力等を身に付けること。

(イ) 歴史資料の特性を踏まえ，資料から読み取れる情報から，近代の特色について多

面的・多角的に考察し、仮説を表現すること。

内容の取扱い

(2) 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

ウ 内容のA, B, C及びDのそれぞれの(2)については、政治や経済、社会、生活や文化、国際環境など、各時代の特色を生徒が読み取ることができる複数の適切な資料を活用し、それぞれの(1)で表現した問いを踏まえ、中学校社会科歴史的分野における学習の成果を活用するなどして、対象となる時代の特色について、生徒が仮説を立てることができるよう指導を工夫すること。その際、様々な歴史資料の特性に着目し、諸資料に基づいて歴史が叙述されていることを踏まえて多面的・多角的に考察できるように、資料を活用する技能を高める指導を工夫すること。また、デジタル化された資料や、地域の遺構や遺物、歴史的な地形、地割や町並みの特徴などを積極的に活用し、具体的に学習できるよう工夫するとともに、歴史資料や遺構の保存・保全などの努力が図られていることに気付くようにすること。

ク 内容のDについては、次のとおり取り扱うものとする。

(1)、(2)及び(3)については、日記、書簡、自伝、公文書、**新聞**、統計、写真、地図、映像や音声、生活用品の変遷などの資料や、それらを基に作成された資料などから適切なものを取り上げること。

(略)

(3) 近現代の地域・日本と世界の画期と構造

この中項目では、(1)で学んだ近世から近代への転換の理解や時代を通観する問い、(2)で表現した近代を展望する仮説を踏まえるとともに、「歴史総合」での学習の成果を活用して、近現代の地域・日本と世界の相互の関係を構造的に整理し、多様な視点から歴史に関わる諸事象について深い理解を図ることをねらいとしている。その際、大項目AからCまでの前近代の学習で習得した資料を扱う技能を活用し、近代から現代にいたる国家や社会の展開について、事象の意味や意義、関係性、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを多面的・多角的に考察し、根拠を示して表現する学習を通じて、近現代がどのような時代であったかを理解するとともに、思考力、判断力、表現力等の育成を図ることをねらいとしている。

また、この中項目(3)では、「地域社会と日本や世界の歴史的な変化との関係性に着目して具体的に考察できるように」(内容の取扱い)、(3)のイの(ア)から(エ)までに、「地域社会」に着目する視点が示されている。「歴史総合」で学んだ「近現代における歴史の大きな変化」が、具体的に地域にどのような影響を与え、変化をもたらし、あるいは課題を生じてその課題にどのように対処していったのかについての探究ができるように指導を工夫することが大切である。

学習に当たっては、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする力を段階的に高めていくことが必要であり、様々な資料の特性に着目して複数の資料の活用を図

って、資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察したり解釈の多様性に気付くようにしたりすることが大切である。(略)

(3) 近現代の地域・日本と世界の画期と構造

諸資料を活用し、(2)で表現した仮説を踏まえ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 明治維新、自由民権運動、大日本帝国憲法の制定、条約改正、日清・日露戦争、第一次世界大戦、社会運動の動向、政党政治などを基に、立憲体制への移行、国民国家の形成、アジアや欧米諸国との関係の変容を理解すること。

(イ) 文明開化の風潮、産業革命の展開、交通の整備と産業構造の変容、学問の発展や教育制度の拡充、社会問題の発生などを基に、産業の発展の経緯と近代の文化の特色、大衆社会の形成を理解すること。

(ウ) 恐慌と国際関係、軍部の台頭と対外政策、戦時体制の強化と第二次世界大戦の展開などを基に、第二次世界大戦に至る過程及び大戦中の政治・社会、国民生活の変容を理解すること。

(エ) 占領政策と諸改革、日本国憲法の成立、平和条約と独立の回復、戦後の経済復興、アジア諸国との関係、高度経済成長、社会・経済・情報の国際化などを基に、我が国の再出発及びその後の政治・経済や対外関係、現代の政治や社会の枠組み、国民生活の変容を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) アジアや欧米諸国との関係、地域社会の変化、戦争が及ぼした影響などに着目して、主題を設定し、近代の政治の展開と国際的地位の確立、第一次世界大戦前後の対外政策や国内経済、国民の政治参加の拡大について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

(イ) 欧米の思想・文化の影響、産業の発達背景と影響、地域社会における労働や生活の変化、教育の普及とその影響などに着目して、主題を設定し、日本の工業化の進展、近代の文化の形成について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

(ウ) 国際社会やアジア近隣諸国との関係、政治・経済体制の変化、戦争の推移と国民生活への影響などに着目して、主題を設定し、第二次世界大戦と日本の動向の関わりについて、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

(エ) 第二次世界大戦前後の政治や社会の類似と相違、冷戦の影響、グローバル化の進展

の影響、国民の生活や地域社会の変化などに着目して、主題を設定し、戦前と戦後の国家・社会の変容、戦後政治の展開、日本経済の発展、第二次世界大戦後の国際社会における我が国の役割について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

(ウ) 日本と世界の相互の関わり、地域社会の変化、(ア)から(エ)までの学習で見いだした画期などに着目して、事象の意味や意義、関係性などを構造的に整理して多面的・多角的に考察し、我が国の近現代を通じた歴史の画期を見だし、根拠を示して表現すること。

内容の取扱い

(2) 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

エ 内容のA、B、C及びDのそれぞれの(3)については、それぞれの(2)で表現した仮説を踏まえて主題を設定すること。その際、資料を活用し、事象の意味や意義、事象相互の関係性などを考察できるよう指導を工夫すること。また、根拠や論理を踏まえ、筋道を立てて説明するなどの学習から、歴史に関わる諸事象には複数の解釈が成り立つことや、歴史の変化の意味や意義の考察から、様々な画期を示すことができることに気付くようにすること。また、それらの考察の結果を、文章としてまとめたりするなどの一連の学習を通して、思考力、判断力、表現力等の育成を図ること。

ク 内容のDについては、次のとおり取り扱うものとする。

(1)、(2)及び(3)については、日記、書簡、自伝、公文書、**新聞**、統計、写真、地図、映像や音声、生活用品の変遷などの資料や、それらを基に作成された資料などから適切なものを取り上げること。(略)

(略)

【小項目(イ)】

ア 次のような知識を身に付けること。

(イ) 文明開化の風潮、産業革命の展開、交通の整備と産業構造の変容、学問の発展や教育制度の拡充、社会問題の発生などを基に、産業の発展の経緯と近代の文化の特色、大衆社会の形成を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 欧米の思想・文化の影響、産業の発達の背景と影響、地域社会における労働や生活の変化、教育の普及とその影響などに着目して、主題を設定し、日本の工業化の進展、近代の文化の形成について、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

内容の取扱い

(3)のイの(ア), (イ), (ウ)及び(エ)については, 地域社会と日本や世界の歴史的な変化との関係性に着目して具体的に考察できるようにすること。

学習に当たっては, 日本の工業化の進展, 近代の文化の形成について考察するための主題を設定し, その主題を, 例えば, 「なぜ工業化は進展したのであろうか, またそれによって社会のありかたはどのように変わったのだろうか」, 「大衆化の潮流は, 地域社会にどのように影響し, 人々はどのように受け止めたのだろうか」などの, 学習上の課題(小項目全体に関わる問い)として提示し, 小項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのために, 以下のそれぞれの事象の学習では段階的な課題(問い)を設定することが求められる。このような一連の学習の過程を通して, この小項目のねらいである産業の発展の経緯と近代の文化の特色, 大衆社会の形成の理解に至ることが考えられる。(略)

【諸事象の解釈や画期を表現する学習】

この小項目の内容の確かな理解を図るためには, 生徒が上記の意味や意義, 関係性などの考察を踏まえて, 考察の結果を根拠や論理をもって筋道を立てて説明したり, 歴史に関わる諸事象についての複数の解釈や, 歴史の展開における様々な画期について考察した結果を表現したりする学習が重要となる。

例えば, 「あなたは, 人々の暮らしに最も影響を与えた新たな思想や出来事は何だったと考えるか」, 「あなたは日本で産業革命と呼ばれるような急激な変化がこの時期に生じた最大の理由は何だと考えるか」などの, 諸事象の解釈や画期を考察し表現するための課題(問い)を設定して, 当時の人々の生活や文化の変化の意義について根拠を基に判断して表現する学習や, 輸出需要に応えた蚕糸業の急速な拡大や鉄道路線の急速な拡大の背景に存在する, 所有権や営業の自由の保証, 産業育成政策, 情報伝達の速さ, 製品改良や新技術の導入を図り起業できる知識をもった人の存在などについて考察し, 根拠を基に何が重要であるかを判断したり, その理由を表現したりするなどの学習が考えられる。また, 「あなたは教育の普及により, 社会にどのような変化があったと考えるか」, 「あなたは社会問題への対応を通じて, 社会にどのような変化がもたらされたと考えるか」などの課題(問い)を設定して, 初期の大衆社会のありようを**マスメディア**や出版, 映画などの受容も含めて考察し, 根拠を基に自らの考えを表現する学習や, 近代社会の形成や変化の中で, 産業発展とそれによる社会問題への対応とがどのような関係にあったのかを, 根拠を基に考察して表現するなどの学習が考えられる。

【小項目(ウ)】

ア 次のような知識を身に付けること。

(ウ) 恐慌と国際関係, 軍部の台頭と対外政策, 戦時体制の強化と第二次世界大戦の展開などを基に, 第二次世界大戦に至る過程及び大戦中の政治・社会, 国民生活の変容を理解すること。

イ 次のような思考力, 判断力, 表現力等を身に付けること。

(ウ) 国際社会やアジア近隣諸国との関係、政治・経済体制の変化、戦争の推移と国民生活への影響などに着目して、主題を設定し、第二次世界大戦と日本の動向の関わりについて、事象の意味や意義、関係性などを多面的・多角的に考察し、歴史に関わる諸事象の解釈や歴史の画期などを根拠を示して表現すること。

内容の取扱い

(3)のアの(ウ)については、第二次世界大戦の学習において、この戦争が人類全体に惨禍を及ぼしたことを基に、平和で民主的な国際社会の実現に努めることが大切であることを認識できるようにすること。(3)のイの(ア)、(イ)、(ウ)及び(エ)については、地域社会と日本や世界の歴史的な変化との関係性に着目して具体的に考察できるようにすること。

学習に当たっては、第二次世界大戦と日本の動向の関わりについて考察するための主題を設定し、その主題を、例えば、「未曾有の戦禍をもたらした戦争はなぜ起こったのだろうか。これを避けることはできなかったのだろうか」などの、学習上の課題（小項目全体に関わる問い）として提示し、小項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのために、以下のそれぞれの事象の学習では段階的な課題（問い）を設定することが求められる。このような一連の学習の過程を通して、この小項目のねらいである第二次世界大戦に至る過程及び大戦中の政治・社会、国民生活の変容の理解に至ることが考えられる。

(略)

【諸事象の解釈や画期を表現する学習】

この小項目の内容の確かな理解を図るためには、生徒が上記の意味や意義、関係性などの考察を踏まえて、考察の結果を根拠や論理をもって筋道を立てて説明したり、歴史に関わる諸事象についての複数の解釈や、歴史の展開における様々な画期について考察した結果を表現したりする学習が重要となる。

例えば、「あなたは、国際連盟を脱退した時期の情勢の中で、日本が国際的孤立を避けるために、どのような外交関係を結ぶことが有効であったと考えられるか」などの、諸事象の解釈や画期を考察し表現するための課題（問い）を設定して、日本が、国際的孤立を回避するために、アメリカ合衆国やソヴィエト連邦など国連未加入国やドイツ・イタリアとの関係を、どのように構築しようとしたかを考察したり、「あなたは、戦争が不可避となった画期について、どの出来事がそれにあたりと考えるか、当時、どのような根拠に基づいてそれが選択されたと考えるか、現代において同様の事態を回避するためには何が必要なのだろうか」などの課題（問い）を設定して、世界恐慌を契機とした保護貿易主義の広がりや全体主義の台頭、中国などにおける民族運動の進展などの国際環境と国内の状況とを関連付けて考察したりして、当時の国際状況、国内状況についての考察を踏まえ、歴の中で、どのような判断が何を根拠に行われたのかについて、根拠を基に考察した結果を表現するなどの学習が考えられる。その際、当時の**新聞**などから世論の動向を読み取ったり、様々な人々の回顧録などから、当時どのような観点で議論が進められたのかなどについて考察して、現代の視点と比較しながらお互いに議論するなどの学習も考えられる。(略)

(4) 現代の日本の課題の探究

この中項目では、これまでの学習を踏まえ、持続可能な社会の実現を視野に入れ、地域社会や身の回りの事象と関連させて主題を設定し、諸資料を活用して探究する活動を通して、現代の日本の課題の形成に関わる歴史と展望について、多面的・多角的に考察、構想して表現することをねらいとしている。(略)

(4) 現代の日本の課題の探究

次の①から③までについて、内容のA、B及びC並びにDの(1)から(3)までの学習を踏まえ、持続可能な社会の実現を視野に入れ、地域社会や身の回りの事象と関連させて主題を設定し、諸資料を活用して探究する活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。

① 社会や集団と個人

② 世界の中の日本

③ 伝統や文化の継承と創造

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 歴史的経緯を踏まえて、現代の日本の課題を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 歴史の画期、地域社会の諸相と日本や世界との歴史的な関係、それ以前の時代からの継続や変化などに着目して、現代の日本の課題の形成に関わる歴史について、多面的・多角的に考察、構想して表現すること。

内容の取扱い

(4)については、この科目のまとめとして位置付けること。その際、生徒の生活や生活空間、地域社会との関わりを踏まえた主題を設定するとともに、歴史的な経緯や根拠を踏まえた展望を構想することができるよう指導を工夫すること。

学習に当たっては、内容のA、B及びC並びにDの(1)から(3)までの学習を踏まえて、イ(ア)の歴史の画期、地域社会の諸相と日本や世界との歴史的な関係、それ以前の時代からの継続や変化などに着目して、現代の日本の課題の形成に関わる歴史について、主題を設定し、多面的・多角的に考察・構想したり表現したりすることで、この中項目の冒頭に示したねらいを達成することが大切である。

この中項目における主題を設定し、諸資料を活用して探究する学習とは、生徒がこれまでの学習を踏まえて、自ら主題を設定することを示している。

指導に当たっては、これまでの学習で養った歴史的な見方・考え方を働かせることや、生徒が持続可能な社会の実現を視野に、地域社会、生徒の生活や生活空間との関わりを踏まえた主題の設定ができるように工夫することが大切である。

現代の日本の課題の形成に関わる歴史については、歴史に関わる諸事象のうち、私たちに関わりの深い地域社会や、私たちの身の回りに存在し、その解決が求められている課題とのつながりが見いだされるものを示している。

歴史的な経緯や根拠を踏まえた展望とは、見いだされた歴史に関わる諸事象について、同時代の評価や対応、推移や変容、意味や意義に着目して、私たちの生活様式や社会の在り方、現代の国際関係や諸地域間の結びつき、伝統文化や新技術などが、過去の歴史的な画期や様々な交流を経て形成されたことを適切な資料に基づいて多面的・多角的に考察すると共に、生徒自身が主体となる社会への見通しを示すことを意味する。

学習に当たっては、次のような学習展開が考えられる。

I 主題の設定と学習上の課題（問い）の表現

これまでの学習を踏まえ、**新聞**やテレビ、インターネット等の**ニュース**や、雑誌・書籍、実際に見聞きするなどして見いだした、現代的な課題に結びつく歴史に関わる事象について、持続可能な社会の実現を視野に入れ、地域社会や身の回りの事象と関連させて、①社会や集団と個人、②世界の中の日本、③伝統や文化の継承と創造の、いずれか一つ、もしくはこれらが複合的に関連する主題を設定し、学習上の課題（問い）として表現する。

例えば、「社会や集団と個人」を取り上げた場合には、集団における意思決定や合意形成への関心から「歴史の中で合意形成の在り方はどのように変化してきたのか、そして今後はどうあるべきだろうか」などの主題に基づく学習上の課題（問い）を表現して探究することが考えられる。

「世界の中の日本」を取り上げた場合には、地域の企業の海外進出についての**新聞記事**への関心から「世界情勢の変化は地域の産業をどのように変えてきたのか、そして今後、世界とどう関わっていくべきだろうか」など、主題に基づく課題（問い）を表現して探究することが考えられる。

「伝統や文化の継承と創造」を取り上げた場合には、地域の祭礼について調べたり、参加するなどの実体験から「社会の変化は伝統文化にどのような影響を与えてきたのか、今後伝統文化はどうなっていくのだろうか」など、設定した主題に基づく課題（問い）を表現したりして探究することが考えられる。

指導に当たっては、主題が地域社会や生徒の生活や生活空間と関連したものであり、かつ科目のまとめとして適切かといった観点に留意することが望まれる。その際、生徒が相互に主題や主題に基づく課題（問い）の妥当性について議論し、より良い主題や課題（問い）を主体的に設定できるようにするなどの活動も考えられる。

II 仮説の設定と諸資料の活用

設定した主題を、学習上の課題（問い）に表現した後、主題に関わる歴史や現状を知るための資料を収集する。資料の収集に当たっては、これまでの学習の成果を生かし、資料の有効性や限界等の基本的特性を踏まえた上で、**新聞**や雑誌、写真、映像や遺物などを活用する。その際、博物館や資料館、図書館、公文書館、また、デジタルアーカイブなどの果たす役割に着目すると共に、フィールドワークなどの調査・見学などの学習活動を取り入れることが考えられる。その上で、収集した資料を基に、主題に関する仮説が表現される。例えば、「歴史の中で合意形成の在り方はどのように変化してきたのか、そして今後は

「どうあるべきだろうか」などの主題に基づく学習上の課題(問い)を設定した場合には、中世の惣村の自治や近世の地方や町方の資料、近代の地方自治や住民自治に関する資料から、「政治や社会全体の変化が地域住民の合意形成や自治の在り方に大きな影響を与えるのではないかな」などの仮説を立てることが考えられる。

例えば、「世界情勢の変化は地域の産業をどのように変えてきたのだろうか、そして今後世界とどう関わっていくべきだろうか」などの学習上の課題(問い)を設定した場合には、ある企業の海外事業所数の変遷から、「地域の産業の変化には海外の戦争や景気が関わっているのではないかな」という仮説を立てることが考えられる。

例えば、「社会の変化は伝統文化にどのような影響を与えてきたのか、今後伝統文化はどのように変わっていくのだろうか」などの主題に基づく課題(問い)を設定した場合には、実際に祭礼に参加した体験や他の参加者からの聞き取りなどを基に、「地域の祭礼の表現や装飾は、時代の価値観を反映しているのではないかな」という仮説を立てることが考えられる。

指導に当たっては、資料が主題と関連したものであり、仮説の設定のために適切かといった観点に留意し、場合によって外部の機関や地域の協力が得られるよう助言や働き掛けを行うことが望まれる。その際、生徒が相互に協力して資料を収集したり、仮説の妥当性を相互に検証したりする活動も考えられる。

Ⅲ 仮説の吟味や妥当性の考察

Ⅱで設定した仮説を検証するため、これまでの学習の成果を生かし、様々な資料を基に、歴史の画期に着目して歴史に関わる事象の推移や変化、因果関係を考察し、資料に見られる諸事象の歴史の展開における意味や意義を考察する。その際、複数の資料を活用するとともに、資料を批判的に吟味し、複数の解釈を比較することで多面的・多角的な考察が行われるように留意する。

例えば、「歴史の中で合意形成の在り方はどのように変化してきたか、どうあるべきだろうか」などの主題に基づく課題(問い)を設定した場合には、地下掟や村掟、地方自治に関する法令や統計などの資料を基に、身分制の下で展開された自治と、近代の自治、さらに地方自治法制定前後で自治の在り方が変化してきたことや、近年の地域人口の変化などが地方自治にもたらす諸課題について多面的・多角的に考察し、地方自治や住民自治のあるべき姿について展望するといった学習活動が想定できる。

例えば、「世界情勢の変化は地域の産業をどのように変えてきたのか、そして今後世界とどう関わっていくべきなのだろうか」などの主題に基づく課題(問い)を設定した場合には、自治体史や企業の社史など中世や近世の基盤の上に地域の産業が成立していったことを示す文字資料や、近現代の戦争や世界恐慌、国際条約などが地域の産業へ与えた影響を示す諸統計及び産業遺跡などの資料を基に、地域の産業の成り立ちと変容について多面的・多角的に考察し、グローバル化する産業社会の中での地域の産業のあるべき姿について展望するなどの学習活動が想定できる。

例えば、「社会の変化は伝統文化にどのような影響を与えてきたのか、今後伝統文化はど

うなっていくのだろうか」などの主題に基づく課題(問い)を設定した場合には、地域の祭礼などを記録した地方や寺社などに残る文書などの文字資料や、それらを記録した写真や映像などの資料、祭礼の規模や種類の推移、近現代における寺社の統合や消滅、自治体の人口やその構成などを示す統計資料及び遺物や口承などを基に、地域の祭礼の在り方が社会の変化に応じて変容してきた様子について多面的・多角的に考察し、伝統や文化の現状について理解し、それを継承していくために課題を解決したり、新たな形で文化を発信する意義について展望したりするなどの学習活動が想定される。

指導の際には、論証に用いた資料の選び方やその解釈の仕方は適切か、取り上げた歴史に関わる事象についての学説面の理解や説明は合理的で適切か、関連する諸事象や互いに異なる諸見解などを踏まえて多面的・多角的に考察しているか、展望は、歴史的経緯を踏まえて論理的になされているかといった観点に留意することが望まれる。

IV 学習の成果の発表と対話(歴史の論述)

「考察、構想して表現する」については、探究した主題についてレポートやポスター、スライドの形でまとめるなどして、授業の中などで生徒による発表や意見交換の場面を設定することが望ましい。その際、これまでの学習を踏まえ、主題や仮説の設定が地域社会や生徒の生活や生活空間に関連したものとなっているか、資料が活用されており、その解釈は適切か、説明の内容・表現が的確かといった点などを踏まえて確かな根拠に基づいた考察になっているか、生徒が相互に評価しあうことが考えられる。また、教師や生徒相互の評価などを受けて振り返りを行い、再度考察、構想して理解を深める活動も想定される。

指導の際には、Ⅲに示した観点が適切に表現されているかに着目するとともに、発表や相互評価を経て理解が更に深まったかといった観点に留意することが考えられる。

こうした学習を通して、生徒が歴史を学ぶ意義をより深く認識しつつ、人間尊重の精神に基づく真の国際理解を深め、地域を含めた社会の有為な形成者としての主体性や、日本の果たし得る役割や、諸地域や世界各国の相互協力の必要性について認識できるようにすることが重要である。

第5節 世界史探究

2 内容とその取扱い

<「世界史探究」の学習の構成>

⑤課題(問い)の設定と資料の取扱い

「世界史探究」では、学習全般において課題(問い)を設定し追究する学習が求められる。この学習において重要であるのは、第一に課題(問い)の設定であり、第二に課題(問い)の追究を促す資料の活用である。以下、それぞれに関する参考例を示す。

(略)

<資料の取扱い>

「世界史探究」では、学習全般にわたって資料活用の重要性が示されているが、その際、資料を活用する技能を高めるために、例えば以下のような留意点が考えられる。

【資料に「問いかける」学習】

諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を段階的に身に付けていくためには、例えば、文字などで記述された資料の内容と当該資料のもつ文脈、状況、前後関係、背景を理解していくことが重要である。文字資料であれば、そこに書かれた内容から、「いつ書いたものか、どんな人物が書いたものか、どこに発表したものか」など、日付、人物、出来事などを読み取る。

さらに「作成者が直接経験した記録なのか、見聞したものなのか、作成者の解釈か、作成者個人の感想か」、「この資料が作成された背景とはどのようなものだったのか、また、どのような意図があったと考えるか」などを教師が問い、生徒が資料の持つ意味や重要性を考えることができるように指導を工夫することが大切である。

また、ある歴史的な事象に関する複数の資料を比較検討して異同を確認することなどの活動は、歴史の多様な解釈の叙述について理解することができ、生徒に疑問を生じさせることに有効である。その際、例えば、絵画と文書のように異なる種類の資料を活用することで、より深い読み取りを促すことができる。

【様々な資料の活用】

新聞・雑誌等を含む文献資料をはじめ、建造物や日常の生活用品を含めた遺跡や遺物、絵画や地図、写真等の画像、映画等の映像、それに伝承や習俗、地名、言語など、様々なものが歴史を考察する上での資料として活用することができる。今日に残された資料を歴史資料として扱う際には、それぞれの資料としての有効性や限界等の基本的な特性が存在することを理解できるようにすることが大切である。その理解を踏まえ、資料から過去の出来事や景観、生活、思想、社会、伝統や文化などを推察する学習活動を通じて、歴史資料が果たす役割に気付くようにして、歴史への関心が高められるようにすることが大切である。

【デジタル化された資料の活用】

博物館、図書館などでは、その収蔵品をはじめ、文化資源をデジタル化して保存を行うとともに、公開や利用を積極的に行う取組が進んでいる。これらのデジタル化された資料は、インターネットを利用することで、利用の可能性を拡大している。多様な歴史資料にアクセスすることで、一層の具体性をもった歴史学習が可能となる。

D 諸地域の結合・変容

(1) 諸地域の結合・変容への問い

この中項目は、諸資料を活用し情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けるとともに、諸地域の結合・変容を読み解く観点について考察し表現する学習活動を通して見いだした問いを表現することをねらいとしている。(略)

人々の国際的な移動、自由貿易の広がり、**マスメディア**の発達、国際規範の変容、科学・技術の発達、文化・思想の展開などに関する資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような技能を身に付けること。

(ア) 資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 諸地域の結合・変容に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目し、諸地域の結合・変容を読み解く観点について考察し、問いを表現すること。

内容の取扱い

(1)については、生徒の学習意欲を喚起する具体的な事例を取り上げ、(2)、(3)及び(4)の学習内容への課題意識やそれらの学習への見通しをもたせるよう指導を工夫すること。また、観点を踏まえることで、諸地域の結合・変容を構造的に捉えることができることに気付くようにすること。

学習に当たっては、中学校までの学習や「歴史総合」の学習の成果を活用して、資料から情報を読み取ったりまとめたりする技能を習得し、イ(イ)の諸地域の結合・変容に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目して、諸地域の結合・変容を読み解く観点について考察し、生徒が問いを表現することにより、この中項目の冒頭に示したねらいを実現することが大切である。

ここに示されている諸地域の結合・変容を読み解く観点とは、例えば、人々の国際的な移動、自由貿易の広がり、**マスメディア**の発達、国際規範の変容、科学・技術の発達、文化・思想の展開などが考えられる。人々の国際的な移動による国際関係の緊密化、自由貿易の広がりによる市場の拡大、**マスメディア**の発達による社会の変容、国際規範の変容に見られる国際秩序観の変化、科学・技術の発達がもたらした社会の変容、文化・思想の展開に見られる知的活動の特色などに照らして考察することで、諸地域の結合・変容を構造的に捉えることができることに気付くようにする。

問いを表現するとは、人々の国際的な移動、自由貿易の広がり、**マスメディア**の発達、国際規範の変容、科学・技術の発達、文化・思想の展開などに関する資料を活用し、情報を読み取ったりまとめたり、複数の資料を比較したり関連付けたりすることにより、諸地域の結合・変容に関わって抱いた興味・関心や疑問、追究してみたいことなどを見いだす学習活動を意味している。歴史に対する驚きや素朴な問いが歴史学習の出発点であることを踏まえ、生徒が資料から読み取った歴史についての事象それ自体への問いを表現する中で、学習内容に対する生徒の課題意識を育むことが大切である。生徒が問いを表現する過程においては、単に驚きや素朴な問いを表現するにとどまらず、「歴史総合」で学習した「問いを表現する」学習活動を踏まえ、資料から読み取ることができる内容と既有的知識を関連付けるなどして考察し、表現した問いについて予想や仮説を考案するなどして解決の見

通しをもたせ、歴史の理解を深めるような適切な問いを新たに練り直すような学習活動を、生徒の考察状況に則して段階的に工夫することも有効である。

「(2)、(3)及び(4)の学習内容への課題意識やそれらの学習への見通しをもたせるよう指導を工夫すること」(内容の取扱い)について、この中項目は、「歴史総合」の学習内容をさらに長い時間軸の中で位置付けたり、諸地域に着目して広い視野で捉え直したりする機会として位置付けられていることを踏まえるとともに、大項目Dの学習全体への課題意識やそれらの学習への見通しをもたせるために置かれていることから、生徒の学習意欲を喚起する複数の資料、例えば、記念碑などの歴史的建造物やその他の遺物、公文書や手紙・日記、**新聞・雑誌の記事や論説**、写真や音声・映像、歴史書、芸術作品や風刺画、科学・技術に関わる文献、統計、さらにこの時代を示す年表や地図などを活用し、具体的な事例に基づく学習活動を通して観点について考察し、生徒の課題意識を高め、生徒が自分自身の問いを表現できるようにすることが求められる。続く(2)、(3)及び(4)の学習では、教師が、生徒の表現した問いを基に主題を設定したり、生徒の表現した問いと関連付けて主題を設定したり、学習過程において生徒の表現した問いに触れたりするなどの学習活動を行うことを想定して、大項目Dの学習全体を見通して指導計画を工夫することが必要である。

学習に際しては、以下に示す資料を活用して、生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、諸地域の結合・変容に関わって抱いた興味・関心や疑問、追究してみたいことなどを見いだし、自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。(略)

マスメディアの発達を取り上げた場合には、教師が、ラジオや雑誌などの普及の様子を示す資料、娯楽映画・旅行・工業製品などの宣伝広告に関する資料、戦時における**報道**の様子を示す資料など複数の資料を提示し、**マスメディア**の発達による社会の変容に照らして諸地域の結合・変容を読み解く観点に関わる問いかけを行うなどして、生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料を読み解くことができるように指導を工夫する。生徒は、それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、**マスメディア**の特徴、情報の普及・画一化が社会に与えた影響、個人と社会との関係の変容などについて考察する。(略)

その際、人々の国際的な移動、自由貿易の広がり、**マスメディア**の発達、国際規範の変容、科学・技術の発達、文化・思想の展開などの資料を複数組み合わせ関連付けたり、それらのうち一つであっても視点の異なる複数の資料を比較したりするなど、豊富な資料を基に、生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりすることにより、諸地域の結合・変容を読み解く観点についての考察を深め、自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。

また、(1)で表現した問いを(2)以降の学習の過程において深化させたり、新たな課題(問い)を見いだしたりするなどして、生徒の歴史学習に対する関心を高め、課題意識を醸成し、生徒の新たな学びに向かう姿勢を育んでいくことが大切である。(略)

E 地球世界の課題

(3) 科学技術の高度化と知識基盤社会

この中項目では、主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、現代の科学技術や文化の歴史的な特色、第二次世界大戦後の科学技術の高度化と政治・経済・社会の変化との関連性などを考察したり表現したりして、知識基盤社会の展開と課題を理解することをねらいとしている。(略)

諸資料を活用し、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 原子力の利用や宇宙探査などの科学技術、医療技術・バイオテクノロジーと生命倫理、人工知能と労働の在り方の変容、情報通信技術の発達と知識の普及などを基に、知識基盤社会の展開と課題を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 科学技術の高度化と知識基盤社会に関わる諸事象の歴史的背景や原因、結果や影響、事象相互の関連などに着目し、主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、現代の科学技術や文化の歴史的な特色、第二次世界大戦後の科学技術の高度化と政治・経済・社会の変化との関連性などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

内容の取扱い

(3)については、欧米などの動向のみを取り上げるのではないよう留意し、持続可能な社会の実現に向け、科学技術における知識の在り方について、人文科学や社会科学等の知識との学際的な連携が求められていることに気付くようにすること。

学習に当たっては、生徒の学習への動機付けや見通しを促しつつ、イ(ア)の科学技術の高度化と知識基盤社会に関わる諸事象の歴史的背景や原因、結果や影響、事象相互の関連などに着目して、中項目のねらいに則した考察を導くための主題を設定する。その主題を、例えば、「20世紀後半以降の科学技術や文化にはどのような特色があり、科学技術の高度化はどのように政治・経済・社会の変化と関わって展開してきたか」などの学習上の課題(中項目全体に関わる問い)として設定する。これを踏まえて、諸資料を比較したり関連付けたりするなどして、多面的・多角的に考察し表現することにより、知識基盤社会の展開と課題を理解する学習が考えられる。(略)

情報通信技術の発達と知識の普及については、情報手段・マスメディアの変遷や、インターネット・携帯電話・携帯情報端末の世界的な普及などについて扱う。また、情報化や知識のグローバル化の進展、知識の蓄積やその活用の重要性が高まったこと、知識基盤社会への転換などに伴い、知や人材をめぐる国際競争が激化したことに触れる。

上記の原子力の利用や宇宙探査などの科学技術、医療技術・バイオテクノロジーと生命倫理、人工知能と労働の在り方の変容、情報通信技術の発達と知識の普及の学習については、中項目の主題を基にした学習上の課題(中項目全体に関わる問い)を踏まえ、中項目

のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのため、推移や展開を考察するための課題(問い)を設定し、さらに事象を比較し関連付けて考察するための課題(問い)を設定するなど、事象それぞれの学習の際に、段階的に課題(問い)を設定することが求められる。

こうした諸資料を比較したり関連付けたりする学習を通じて、現代の科学技術や文化の歴史的な特色、第二次世界大戦後の科学技術の高度化と政治・経済・社会の変化との関連性などを多面的・多角的に考察し、表現することにより、知識基盤社会の展開と課題を理解することができる。(略)

(4) 地球世界の課題の探究

この中項目では、「(1) 国際機構の形成と平和への模索」、「(2) 経済のグローバル化と格差の是正」、「(3) 科学技術の高度化と知識基盤社会」で学習した事項を参考にして、持続可能な社会の実現を視野に入れ、「地球世界の課題の形成に関わる」主題について、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、多面的・多角的に考察、構想して探究し、地球世界の課題を理解することをねらいとしている。

ここでは、「世界史探究」の学習の総まとめとして、生徒がこれまでに習得した知識や技能を活用して主体的に探究し、その成果を発表したり討論したりするなどの活動を通して、歴史的経緯を踏まえた地球世界の課題を理解することをねらいとしている。そのため、「歴史総合」の学習を踏まえ、全時代の学習を通して習得した知識や技能を活用することが求められる。(略)

次の①から③までについて、内容のA、B、C及びD並びにEの(1)から(3)までの学習を基に、持続可能な社会の実現を視野に入れ、主題を設定し、諸資料を活用し探究する活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。

① 紛争解決や共生

② 経済格差の是正や経済発展

③ 科学技術の発展や文化の変容

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 歴史的経緯を踏まえて、地球世界の課題を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(イ) 地球世界の課題の形成に関わる諸事象の歴史的背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、地球世界の課題の形成に関わる世界の歴史について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。

内容の取扱い

(4)については、この科目のまとめとして位置付けること。その際、この科目の学習を振り返り、よりよい社会を展望できるようにすること。また、①から③までについては、

相互につながりをもっていることに気付くようにすること。

学習に当たっては、生徒の学習への動機付けや見通しを促しつつ、イ(ア)の地球世界の課題の形成に関わる諸事象の歴史的背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目し、①紛争解決や共生、②経済格差の是正や経済発展、③科学技術の発展や文化の変容について、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせて、諸資料に基づいて考察、構想したり表現したりすることで、よりよい社会を展望できるようにすることが大切である。

探究する活動とは、生徒の発想や疑問をもとに生徒自らが主題を設定し、これまでに習得した歴史の知識、技能を用いたり、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせたりして、歴史的観点から諸資料を活用して主体的に多面的・多角的に考察、構想し、表現する活動である。また、生徒が充実した探究活動を行うためには、教師の支援が大切である。

(略)

以下は、生徒が探究活動を行う際の教師の関わり方の例である。これらは、あくまで参考であり、教師が、生徒の興味・関心や学校、地域の実態に留意し、様々な状況に応じた工夫をすることが大切である。

<「紛争の解決や共生」を扱った例>

【主題の設定と学習上の課題(問い)の表現】

これまでの「世界史探究」の学習内容や「歴史総合」での学習成果を踏まえて、**新聞・ニュース**などで見聞した事象、授業で扱った事象の中から見いだした地球世界の課題について、①紛争の解決や共生、②経済格差の是正や経済発展、③科学技術の発展や文化の変容に関わる課題に関連する主題を生徒が設定する。その際、これまでの「世界史探究」の大項目B、C及びDの(1)でそれぞれ考察した観点を踏まえた問いや、具体的な学習の過程において作り直した問いや新たに出てきた問いなどを振り返らせることが大切である。

また、「主題の設定で理由が明確で、科目のまとめとして適切か」という観点で指導する。「理由が明確」であるとは、取り上げた課題が人類や地球世界にとって重要なものであるかが明確になっていることである。「科目のまとめとして適切」であるとは、全時代の学習を通して歴史的経緯を探究でき、地球世界の課題の形成に関わる諸事象の歴史的背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりに着目した主題となっていることである。

ここでは、生徒が「戦争防止と平和の実現に向けた取組の歴史的経緯とその展望」を主題として設定した場合、「それぞれの時代における、戦争や平和に対する人々の考え方の変化を踏まえて、これからの国際社会において、すべての人が平和を享受するためにはどのようなことに取り組むべきなのか」という学習上の課題(問い)として示すことが考えられる。

【主題の探究】

○ 見通しを立てる

「何をどこまで明らかにするのか」という計画を立てさせるとともに、資料の収集・分析、考察、構想、発表、討論、振り返りまでの探究の過程について、イメージをもたせることも必要である。また、資料の収集・分析については、「資料の選び方やその分析の仕方が適切か」という観点で指導する。「資料の選び方が適切」であるとは、複数の資料によって裏付けが取れていることや客観的な資料を用いていること、さらには資料の有効性や基本的な特性を踏まえていることである。「分析の仕方が適切」とは、事実に基づき論理的に整合のとれた分析をしていること、論証が曖昧な点についてはそれを明記することなどである。

○ 地球世界の課題の把握

本主題の歴史的経緯にかかわる予想（仮説）を設定するために、現在の国際状況を把握するための資料を収集する。ここでは、例えば、近年のノーベル平和賞の受賞者の活動内容に関する資料や国際連合の平和活動についての資料などを収集させ、現在の「平和」という概念について整理する。

○ 予想や仮説を立てる

課題の現状把握とこれまで「世界史探究」で学習してきたことを基に、主題の歴史的経緯にかかわる予想（仮説）を設定させる。例えば、「これから、すべての人が平和を享受するためには、人権問題や貧困問題の解決に努める必要があるだろう」という予想（仮説）が考えられる。

【考察・構想】

考察、構想に際しては、歴史的経緯を踏まえるとともに、関連・関係性、類似と差異、原因・結果、展開や変化（転換、画期）などに関わる視点に着目するよう助言する。本主題に対しては、例えば、それぞれの時代における戦争についての考え方、戦争の禁止についての規定といった歴史的経緯に関わる資料から、戦争の原因や結果、考え方や規定についての変化に着目して、戦争の対極にある「平和」の概念の変化について考察する。ここでは、17世紀のウェストファリア条約によるヨーロッパの主権国家の成立、第一次世界大戦、第二次世界大戦後の国際機構の成立、冷戦の終結などを転換点として、戦争が起こった原因や戦争を防止するための対策について考察する。そこから、その時代の人々にとっての「平和」の意味を考察し、これからの社会ですべての人が平和を享受するためには、人権問題や貧困問題の解決に努める必要があるという結論を導き出す。その際、「取り上げた歴史に関わる諸事象についての学説面の理解や説明は合理的で適切か」、「関連する諸事象や互いに異なる諸見解などを踏まえ、多面的・多角的に考察しているか」という観点に留意することが考えられる。

こうした探究活動の結果、仮説のどこが正しくどこが誤っていたか、そして新たに分

かったことは何かを明らかにし、改めて自分が設定した主題についての結論をまとめる。

【まとめ・表現】

探究した主題の内容を論述・レポートなどにまとめ、相互に説明したり意見を聞いたりすることにより、考察、構想をより深めるなどの学習も大切である。また、ディスカッション、ディベートなど生徒同士が意見交換する場面を設定したり、学習活動のまとめとしてグループやクラスでプレゼンテーションの場面を設定したりするなどの工夫が考えられる。

その際、「論述が、これまでに学習した歴史の脈絡の中に適切に位置付けられ、よりよい社会の展望を視野に入れるとともに、論理的になされているか」という観点で指導する。「歴史の脈絡の中に適切に位置付けられ」ているとは、事象の要因、関連、影響などが歴史的経緯のなかで論証されていることである。「よりよい社会の展望を視野に入れる」とは、暫定的であれ現時点での自分の提言や願いが構想されていることである。「論述が論理的になされている」とは、事実にもとづいて論理に整合性があるとともに、他者の見解と自分の考察が区別して表現されていることである。

また、質疑・討論を経たのちに、その協働的な学習をふりかえることで、主題についての多面的・多角的な考察をいっそう深めさせることができる

このような主題を探究する学習を通じて、歴史を学ぶ意義をより深く理解させつつ、人間尊重の精神に基づく真の国際理解を深め、日本の果たしうる役割や世界各国の相互協力の必要性について理解させることが大切である。

第3章 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

2 内容の取扱いに当たっての配慮事項

2 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(2) 調査や諸資料から、社会的事象に関する様々な情報を効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付ける学習活動を重視するとともに、作業的で具体的な体験を伴う学習の充実を図るようにすること。その際、地図や年表を読んだり作成したり、現代社会の諸課題を捉え、多面的・多角的に考察、構想するに当たっては、関連する各種の統計、年鑑、白書、画像、新聞、読み物、その他の資料の出典などを確認し、その信頼性を踏まえつつ適切に活用したり、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表したりするなどの活動を取り入れるようにすること。

「技能」を身に付けることに関しては、各科目の目標において、具体的に次のように記述している。「地理総合」、「地理探究」ではいずれも「調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」、「歴史総合」では「諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」、「日本史探究」では、「諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切か

つ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」,「世界史探究」では「諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」との記述である。

社会的事象に関する様々な情報の活用について「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2の(2)の配慮事項として示したのは,こうした各科目の目標を受けて,指導の全般にわたって適切な情報活用を促す学習活動を展開することを重視しているからである。

なお,今回の改訂においては,「作業的で具体的な体験を伴う学習」について,これを重視している。これは,作業的で具体的な体験を伴う自らの直接的な活動を通して社会的事象を捉え,認識を深めていくことを期待しているからである。また,言語活動の充実を一層図る観点から,「地図や年表を読んだり作成したり,現代社会の諸課題を捉え,多面的・多角的に考察,構想するに当たっては,関連する各種の統計,年鑑,白書,画像,**新聞**,読み物,その他の資料の出典などを確認し,その信頼性を踏まえつつ適切に活用したり,観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ,発表したりする」と示し,表現力の育成を一層重視している。それは,過程を含めて結果を整理し報告書にまとめたり発表したりする活動は,情報の収集,選択,処理に関する技能を高めるばかりでなく,豊かな表現力を育成する上でも重要だからである。それだけに,今回の改訂の趣旨を踏まえて,技能習得のためのより一層の授業改善に努めることが大切である。

以 上